

第 74 回山形県自作視聴覚教材コンクール 全体講評【学校教育部門】

今年度も力作が多かった。様々な立場、広い年齢層の方々からの応募があり、県民の「学校教育」への関心の高さをうかがうことができた。

今回は特に、デジタルコンテンツとしてオンライン教材が出品されたこともあり、そもそも視聴覚教材とは何なのかを考えさせられた場面があった。ICTの発展・普及に伴い、仮想体験が充実する時代となり、視覚・聴覚の枠を越えた感覚に訴える教材作成が可能となっている今日、新たな方法で作成された教材の持つ可能性は、従来の想像の枠に収まるものではない。一方、伝統的な手法を継承する作品は、各々の着眼点から考えを自由に巡らせることができ、現代の諸課題解決の糸口を探すことに繋がっていることも否めない。

今回の応募作品は、審査時だけでなく、審査後もジレンマにも似た余韻を残すとともに、教材として、将来にわたり、多方面の可能性を再認識させられる素晴らしいものばかりであった。

映像化プレゼンテーションソフト、オンライン、紙芝居等々…、視聴覚教材は、どれもこれまでにない環境の中にある。教材制作の過程で「これまでと同様に」が通用しなくなっているケースも生じているが、新たな課題を乗り越えるチャレンジを楽しみながら、これからも作品作りに挑戦していただきたい。